

2024/8/30

リトルハウス通信

先月のリトルハウス通信にて、「ピアサポートの不思議な力」（相川章子：2022）という論文に出会い、感銘を受けたこと、そして論文の感想についても少し書かせて頂きました。今回のリトルハウス通信は、その続きとなります。前号でも『支援の「場」では、「支援する側一される側」という固定化した役割が存在し、そこ「場」に身を置くやいなや、「能動一受動」の態が規定され、そこから抜け出すことは難しい』（相川 2022：152）ということ当論文から引用し、「支援者」としてリトルハウスに身を置いている私自身、この構造の中にスッポリとハマってしまっていることを書かせて頂きました。即ちここに「支援構造の限界」が見て取れるわけです。

そこで「支援構造の限界」を突破する鍵が、前回も少し触れた「中動態の世界」ということになります。相川は『支援関係のなかで焦点となるのは、「困りごと（＝ ニーズ）」であり、そこには規定された役割が存在し、 困りごとを何とかしようとする意志をもって役割を全うしようとする。そこに構築されるのが「支援する一される」関係である。ピアサポートでは、「経験の語り」が接着剤となって、互いに助け合う、支え合う、という営みである。 その「場」に主体的に存在し、「経験」を差し出し合うことで、その場を共有している人が、その経験を主体的にとらえて、自身の中にある何かと作用し、 リカバリーのきっかけを得るという化学反応を起こす』（相川 2022：152）と、支援関係における焦点と、ピアサポートの存在が当事者のリカバリーに大きく影響することについて記しています。それを前提とし『ピアサポートの場で交わされている言語（態）は、「する（能動態）」でも「される（受動態）」でもない。（中略）それを超えた関係が構築される。』（相川 2022：152）と示唆しています。そしてこの「支援する」でも「支援される」でもない環境（状態）そのものを「中動態の世界」とし、この「中動態の世界」では、「互いが主体的に、自身の変化の可能性を抱えている」（相川 2022：153）と相川は論じています。

以上を踏まえ「中動態の世界」やピアサポートを諦観した場合、「支援者」「ワーカー」「福祉サービス提供者」と呼ばれる我々は、いったいどのスタンスに立脚し「支援」すればよいのでしょうか。あるいは「支援」というスタンスがそもそも違うのでしょうか。そんな考えに至った時、思い浮かんだのは、久保美紀著「ソーシャルワークにおける当事者主体論の検討」（2014）という論文の一節でした。そこで久保は「クライアント・ワーカー関係は基本的に親切で愛他的なものにとらえられるが、権威とコントロールという政治的性質を内包している。クライアントの語り、理論、考慮に対する専門職の理論の優勢は、クライアントを消極的にさせ、自己防衛を生み、自尊感情、自分のライフスタイルを守るために、クライアントに真実を語らせないようにする」（久保 2014：29）とクライアントの主体性を剥奪してしまう構造が支援関係に内包していることを警告している。そこでワーカーに必要な資質を「支配的な言説とパワーの結びつきに挑戦すべく、ワーカーは周縁化された人びとのローカルな知識、語り、つまりクライアントがどのように生き抜き、どのように、困難な状況を乗り越えてきたのか自前の物語を語るのを傾聴し、受け止めなければならない。ワーカーは、クライアントと一緒にもうひとつの知の構築に取り組むのである」（久保 2014：29）としています。即ち、支援者もまた、クライアントと一緒に「中動態の世界」を生きようとする気構えこそ必要なかもしれないと思った次第です。

■引用文献

相川章子（2022）ピアサポートの不思議な力 日本精神保健福祉士協会誌：JJMHSW 53(2) 152 153

久保美紀（2014）ソーシャルワークにおける当事者主体論の検討 -援助されるということへの問い- ソーシャルワーク研究 Vol40 29